

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	小学校4年生の体育授業における戦術的知識の変容に関する一考察：フラッグフットボールにおけるオフENSEスのガードに着目して
Author(s)	與倉，潤也；木原，成一郎；坂田，行平
Citation	初等教育カリキュラム研究，6：105 - 114
Issue Date	2018-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/45483
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045483
Right	Copyright (c) 2018 初等教育カリキュラム学会
Relation	



小学校4年生の体育授業における戦術的知識の変容に関する一考察

－フラッグフットボールにおけるオフENSEのガードに着目して－

與倉 潤也¹，木原成一郎²，坂田 行平³

要約

試合の中で戦術的な動きを行ったり，試合をする以前に作戦を立案したりする際には，いずれも戦術に関する知識が必要となる。それゆえ，ボール運動の学習を効果的に進めるためには，戦術に関する知識の指導が重要であるといえる。本研究は，フラッグフットボールにおけるオフENSEのガードに着目して，児童の戦術的知識の変容を明らかにすることを目的とした。

そこで，単元の前後に戦術的知識テストを行い，記述を分析した。その結果，多くの児童がガードの戦術的知識を獲得していたことが明らかになった。それは具体的には，ガードの役割や原則といったガードの「宣言的知識」や，敵や味方の動きを意識したガードの動き方というガードの「手続的知識」であった。また，作戦を成功させるために必要となる効果的なガードの仕方に関する「手続的知識」を獲得していた児童も多くみられた。

キーワード：ボール運動，フラッグフットボール，戦術的知識，ガード

1. 研究の背景と目的

高橋（1999）によれば，「ゲームパフォーマンス」は「『ボールをもたない動き』と『ボールを操作する技術』によって発揮される」ものであり，さらに，「ゲームでの大半の行動は『ボールをもたない動き』」であるため，「その行動のしかたがゲームパフォーマンスに重要な意義をもつ」とされる。2008年の学習指導要領改訂では，「ボール運動」領域における「技能」の内容として「ボール操作」に加え，新たに「ボールを持たないときの動き」が取り上げられた。このことから，ボール運動の指導においては，学習者の「ゲームパフォーマンス」を向上させることが目指されているといえる。吉永（2006）は，「ボールゲームにおいて，ゲームパフォーマンスを向上へと導くためには，ゲーム状況において生じる課題を合理的に解決するための個人や集団の動き方（＝戦術）の習得が必要となる」と述べる。このように，「ゲームパフォーマンス」を向上させるためには，戦術を教える内容の中心に位置付けた学習が有効であると考えられ，近年，ボール運動の指導においては，戦術に焦点を当てた実践が注目されている。

吉永他（2004）は，小学校6年生のフラッグフットボールの授業を対象として，ゲーム中の「サポート行動」の変容に焦点を当てた研究を行った。「サポート学習」を中心として授業を展開する際に「サポー

¹ 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期 院生

² 広島大学大学院教育学研究科

³ 広島大学附属小学校

トの動き」を高めるような課題練習を設定し、スペースを意図的に創出するための作戦づくりについて指導を行った結果、「ゲームの中で効果的なサポート行動を発揮できるようになり、それによって高いレベルのパス戦術を使った作戦の立案・実行が可能になる」ことが明らかになった。また、鬼澤他(2006, 2007a, 2007b)は、小学校高学年のバスケットボールの授業を対象として、「戦術的知識テスト」と「状況判断テスト」を用いて、「状況判断」に関する理解度の変容、およびゲーム中の「状況判断力」の変容について検討した。授業を行う際に、「ゲームの状況判断(プレー選択の原則)」に関する知識の学習を設定するとともに、その内容の誇張が予想されるアウトナンバーのゲームを取り入れた結果、「認知レベルにおける状況判断力」と「シュート、パス、ボールキープに関するゲーム中の状況判断力」がともに向上することが明らかになった。

これらの先行研究より、「サポート」や「状況判断」といった戦術を教える内容の中心として授業を展開する際には、それらの戦術に関する知識を指導することが重要であり、それによってゲーム中の「サポートの動き」やプレー選択に関する「状況判断力」などが向上することが示唆されている。

坂田他(2009)は、戦術に関する知識の指導が重要であるとした上で、「戦術的知識が求められるのは実際のプレー場面だけではない」と述べる。そこで、「作戦を立案、解釈、修正するための知識」を「戦術の原則」として整理し、それらを示すものとして「戦術的知識」という用語を用いて、小学校5年生のフラッグフットボールの授業における子どもたちの「戦術的知識」の変容を分析した。単元前後に「戦術的知識テスト」を実施し、記述を分析した結果、子どもたちの「戦術的知識」が向上したことが明らかになった。また、藤本(2012a)は、「鬼澤らの述べる『ゲームパフォーマンスを高めるため』の『基本的なボール操作の技能とボールを持たないときの動き』を『実際のゲームで発揮するために、ゲーム場面で生じる課題をどのように解決すればよいのか』という『戦術的知識』及び坂田らの述べる『作戦を立案、修正、解釈するための知識』を合わせた」ものを「戦術的知識」と定義し、小学校4年生のフラッグフットボールの授業における、子どもたちの「戦術的知識」の変容を分析した。その結果、子どもたちは「テストの作戦図に書かれている動きを読み取ることができるか」という各ポジションの役割の知識」と「ゲーム中の状況判断や動きのポイントなど、その作戦を成功させるために必要な知識や、その作戦がうまくいかなかったときにどうすればいいか」といった修正のための知識」といった「戦術的知識」を身に付けていたことが明らかになった。

アンダーソン(1982)によれば、知識は「宣言型知識」と「手続型知識」に分類することができる。「ものを知ること」における知識は「宣言型知識」と呼ばれ、それは「われわれの知っている事実からなる」。また、「方法を知ること」における知識は「手続型知識」と呼ばれ、それは「われわれがやり方を知っている技能(skill)からなる」。また、中川(2000)は、アンダーソン(1982)を引用しながら、「記憶内の知識構造」が状況判断能力などの「認知的スキルの習熟」と深く関わっており、それは、「宣言的知識が蓄積される第1段階、それらの宣言的知識が行動のための手続きに変換されていく過渡的な第2段階、そして目標となる行動がうまくできるように手続的知識が洗練され、集積される第3段階(熟練)」という3つの段階をへて成し遂げられると述べる。

これらのことから、ボール運動における戦術的知識は、戦術に関する「宣言的知識」、「手続的知識」の二つの知識から構成されるものであり、それらの知識は、「宣言的知識」から「手続的知識」へと洗練されていくことが示唆されている。中川(2000)は、「宣言的知識」について、それぞれの種目の「ルールに関する知識、ポジション・試合時間・得点などの状況要素に関する知識、自己や味方の能力に関

する知識，選択肢としての競技行為に関する知識，「試合での戦い方を一般的に支持する戦術的原則に関する知識」とし，「手続的知識」について，「試合状況内の手がかり（条件）とそこで有効な競技行為とが結合した形で記憶されている知識」，試合中に「どこを注意すれば有功な情報が得られるのか，あるいはどこを見れば重要な手がかりを得られるのかを指示する知識」としている。

以上の先行研究を踏まえると，ボール運動の指導においては，戦術を教える内容の中心に位置付けて授業を展開することによって，「ゲームパフォーマンス」を向上させることや，作戦を立てることができるようになることが目指されており，そのためには，戦術に関する知識を指導することが重要となる。そこで本研究では，試合におけるポジションの役割や「戦術の原則」（坂田他，2009）などの戦術に関する「宣言的知識」と「試合状況内の手がかり（条件）とそこで有効な競技行為とが結合した形で記憶されている」（中川，2000）知識などの戦術に関する「手続的知識」を合わせたものを戦術的知識と定義し，小学校4年生のフラッグフットボールの授業を対象として，単元前後における児童の戦術的知識の変容を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

2. 1. 分析の対象

本研究は，2016年10月14日から12月上旬にかけて行われたH大学附属小学校4年生（男子16名，女子16名）のフラッグフットボールの授業（全15時間）を分析の対象とした。授業者であるS教諭は同校の体育専科として勤務している。分析の対象である4年生の児童は，3年生の時，同じく同校の体育専科として勤務しているN教諭が指導したフラッグフットボールの授業を経験している。

本研究において分析の対象とした授業の単元計画は以下の通りであった（表1）。

表1 フラッグフットボール単元計画（全15時間）

次		時	指導内容	学習活動
1	作戦作り・練習	3	・2対2の基本技能と戦術 ・味方との合意形成	・2対2のパターン練習 ・兄弟班との練習
2	パターン練習①	3	・ラン作戦，パス作戦，手渡し作戦における動き	・兄弟班との練習 ・兄弟班以外との対戦
3	作戦作り・練習	2	・3対3での基本技能と戦術 ・各ポジションの役割 ・試しのゲームに向けての作戦作り・練習	・3対3の作戦作り ・兄弟班との練習
4	ためしのゲーム	1	・ゲーム記録の方法 ・ルールの遵守，監督の役割	・兄弟班以外との対戦 ・3対3の作戦の実施
5	作戦の修正・練習	2	・ためしのゲームの振り返りと作戦の修正 ・リーグ戦に向けての作戦の修正・練習	・ビデオ視聴 ・3対3の作戦の修正 ・兄弟班との練習
6	パターン練習②	2	・各ポジションの役割 ・ラン作戦，パス作戦，手渡し作戦における動き	・兄弟班以外との対戦
7	リーグ戦・まとめ	2	・作戦の修正を加えながらのゲーム進行 ・まとめと振り返り	・リーグ戦 ・作戦の実施・修正

2. 2. 資料の収集

児童の戦術的知識の変容を明らかにするために，坂田他（2009）を参考にして，作戦図をもとにし

たフライングフットボールの攻撃と守備に関する戦術的知識テスト（以下、テストと略す）を作成し、単元前後に実施した。図1はテストの一例である。テストは、ラン作戰、パス作戰、手渡し作戰①（渡す場合）、手渡し作戰②（渡さない場合）の4種類の作戰図を用いて、「上の作戰図を見て、あなたが①、②、③のポジションになった場合、この作戰を成功させるためのポイントだと思うことをできるだけ多く書いて下さい」という質問文をもとに自由記述を求めた。なお、テスト作成の際には、授業者であるS教諭と協議を行い、授業の狙いに合わせて内容の修正を行った。

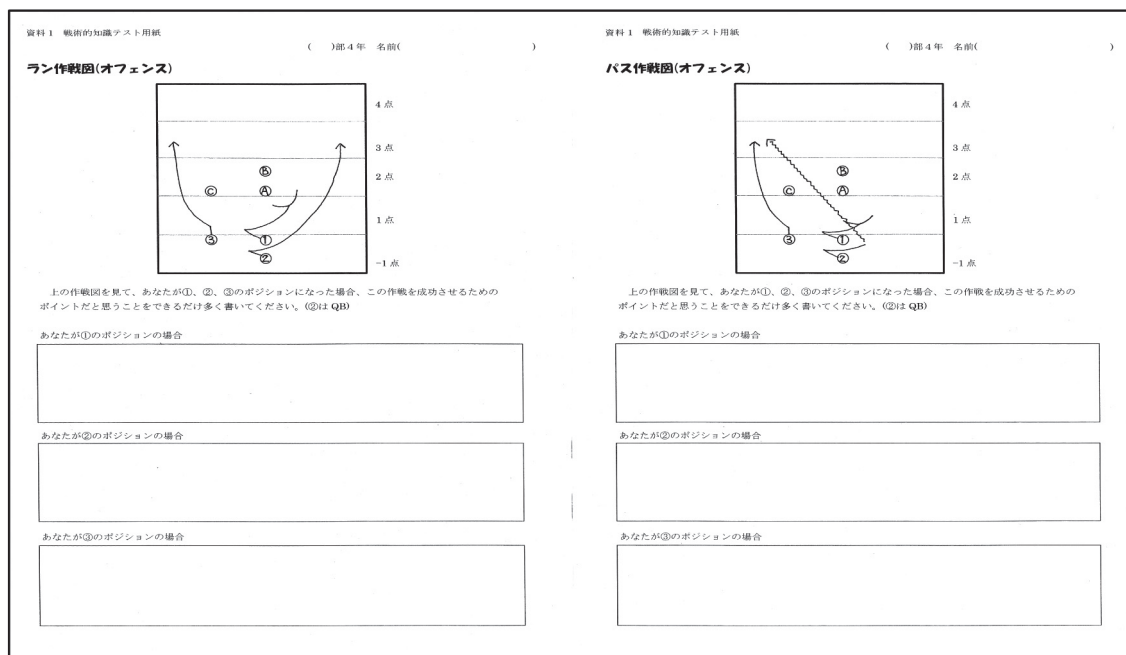


図1 戦術的知識テストの一例

2. 3. 分析の方法

本研究で対象とした授業では、オフェンスの作戰毎の各ポジションの役割と動き方を中心として指導が行われ、特にオフェンスのガードに重点を置いた指導が行われた。ガードとは、敵からボールを保持している味方を守るために行うボールを持たないときの動きである。グリフィン他（1999）によれば、ガードとは「ボールに向かって移動している相手プレイヤーに対するディフェンス」のことであり、「ゲームパフォーマンス」の構成要素の一つとして捉えられている。

フライングフットボールの試合で得点を取るためには、ボール保持者の動きと同様に、ボール保持者を助けるためのボールを持たない人の動きが重要となる。なかでも、敵からボールを取られないようにボール保持者を守るガードの役割は、作戰を成功させるために重要な役割であるといえる。さらに、ガードは個人の運動能力にあまり影響を受けないことから、運動能力の低い児童であっても十分習得可能な内容であると考えられる。これらのことから、ガードはフライングフットボールの授業において優先的に指導すべき内容の一つであると考えられる。以上のことを踏まえ、本研究ではオフェンスのガードに着目して分析を行うこととした。

先に述べたことを踏まえると、ガードの戦術的知識は、ガードの「宣言的知識」、「手続的知識」という二つの知識から構成される。中川（2000）を参考にすると、本研究におけるガードの戦術的知識は具体的に以下のようなものが考えられる（表2）。

表2 本研究におけるガードの戦術的知識

ガードの「宣言的知識」	<ul style="list-style-type: none"> ◆戦術の原則である「攻撃空間の創出」に関する知識 例：スペースを作る，空間を創る ◆ガードの役割に関する知識 例：守る，ガードをする
ガードの「手続的知識」	<ul style="list-style-type: none"> ◆敵や味方の動きを意識した自分の動きに関する知識 例：もし敵が来たらガードし，敵が来ない場合は道を作る 味方とスピードやタイミングを合わせてガードする ◆効果的なガードの仕方に関する知識 例：体をななめにしてガードする，手を大きく広げてガードする ガードをするときにフェイントの動きをする

収集した資料について，以下の手順で分析を行った。単元前後に実施したテストのうち，ガードをする役割があるオフェンス①のプレイヤーの自由記述について，以下の得点基準を用いて採点を行った（表3）。得点基準は，坂田他（2009）が，『戦術知識』が貧弱な段階では自分自身の動きしか説明することができないが，『戦術知識』が深まるにつれて，周りのプレイヤー動きまで説明することができる」といったGriffin et. al.（2001）の論をもとに「戦術的知識」の得点基準を設定したものを参考に作成した。

表3 戦術的知識テストの得点基準（オフェンス①のプレイヤー）

自分自身の役割（原則）に加え，味方（QB）と敵の両方の動きを意識した記述がある 例：味方が走るスペースを作るために向かってくる敵をガードする	5点
自分自身の役割（原則）に加え，敵の動きを意識した記述がある 例：向かってくる敵をガードする	4点
自分自身の役割（原則）に加え，味方（QB）の動きを意識した記述がある 例：味方が走るスペースを作る	3点
自分自身の役割（原則）についてのみ記述がある 例：ガードする，道を作る	2点
自分自身の役割（原則）についての記述がない 例：フェイントをする，左に行く，味方について行く	1点

資料の分析は，授業に参加した児童32名分の記述を用いて行った。得点基準に基づく採点は，授業を観察した大学院生2名が別々に行い，採点結果が異なる箇所については合意が得られるまで協議を行った。児童の戦術的知識の変容を分析する際には，ラン作戦，パス作戦，手渡し作戦①，手渡し作戦②，およびそれらの合計という5つの観点について，それぞれ平均値を求め，それぞれの観点における単元前後の変化について，対応のある平均値の差の検定（t検定）を行った。なお，統計処理にはExcel 2016を使用し，いずれの場合も有意水準は1%未満（ $p < 0.01$ ）とした。

3. 結果と考察

3. 1. 単元前後における平均点の変容

図2は，単元前後における4つの作戦およびそれらの合計の平均点を示したものである。また，表4は，単元前後におけるテストの得点の分布を示したものである。

第1に，4つの作戦の合計という観点について，単元前後の平均値を求め，対応のある平均値の差の

検定 (t検定) を行った結果、有意な差が認められた ($t=-3.5, p=0.001<0.01$)。また、表4の各得点の合計に注目すると、全体として1点、2点の人数が減少し、3点以上の人数が増加する傾向が見られた。これらのことから、授業で中心的に指導されたオフェンス①のガードの役割に関する戦術的知識が、多くの児童に身についたと考えられる。具体的には、ガードの役割や原則といったガードの「宣言的知識」に加え、ガードの役割を果たす際に、敵か味方あるいはその双方の動きを意識するというガードの「手続的知識」が身についたと考えられる。

第2に、4つの作戦の種類別という観点で、それぞれの作戦について単元前後の平均値を求め、対応のある平均値の差の検定 (t検定) を行った。その結果、ラン作戦とパス作戦に関しては有意な差が認められなかったが、手渡し作戦①と手渡し作戦②に関しては有意な差が認められた (手渡し作戦① : $t=-3.5, p=0.001<0.01$, 手渡し作戦② : $t=-3.1, p=0.003<0.01$)。手渡し作戦のガードは、ラン作戦やパス作戦のガードと同様に「敵から味方を守る」ということに加え、「敵をだますためにボールを持っていない味方をガードする」、「敵に見えないように味方の手渡し部分を隠す」など、敵や味方を意識したガードをする必要がある。作戦の立案・実行・修正という授業過程においてこれらのことを実際に経験したことによって、敵か味方あるいはその双方の動きを意識してガードの役割や動きを記述するようになったと推察される。

また、図2を見ると、4つの作戦すべてにおいて、単元前の平均点が3点を超えていることが分かる。先に述べたように、授業者は単元を通してガードの役割や動きに重点を置いて指導を行っており、単元前のテストを実施する前に行った1次の授業における2対2の指導の中でも、ガードの役割や動きについて指導を行っていた。それゆえ、テストを実施する前からガードの役割についてある程度理解している児童が多かったのではないかと推察される。

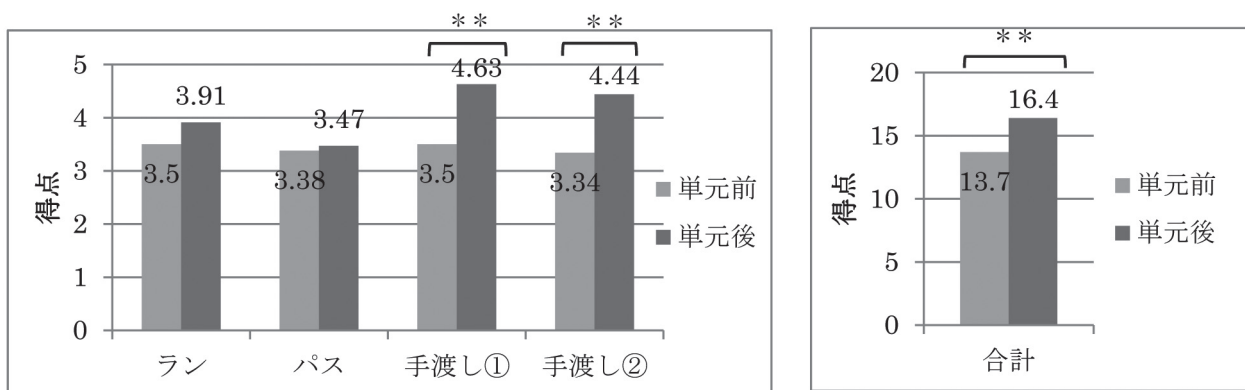


図2 戦術的知識テスト (オフェンス①) の平均点

表4 戦術的知識テスト (オフェンス①) の得点の分布 (単位：人)

作戦	ラン		パス		手渡し①		手渡し②		各得点の合計(延べ)	
	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半
5点	11	15	12	13	12	24	13	26	48	78
4点	4	6	3	2	5	0	6	0	18	8
3点	9	7	9	10	4	6	3	6	25	29
2点	6	1	1	1	4	2	4	0	15	4
1点	2	3	7	6	7	0	6	0	22	9

3. 2. 下位群, 中位群, 上位群の平均点の変容

3. 1において, 単元前後の平均値に有意な差が認められた手渡し作戦①, 手渡し作戦②について, 得点の変容の内実を明らかにするために, 単元前に実施したテストの得点をもとに, 1点の児童を下位群, 2点の児童を中位群, 3点以上の児童を上位群と設定し, 群別に検討を行った。単元前後における各群の平均点の変容は以下の通りであった(図3, 4)。

図3, 図4より, 手渡し作戦①, 手渡し作戦②ともに下位群, 中位群の得点が単元後に増加する傾向が見られた。このことから, 単元前はガードの役割に関する戦術的知識が乏しかったと思われる児童にとって効果的な授業であったといえる。

一方, 上位群の得点の変容については, 手渡し作戦①, 手渡し作戦②ともに単元前と比較して単元後の平均点が増加してはいるものの, それほど大きな伸びは見られない。この要因として, 単元前後で全く同じ内容の記述式のテストを実施しているため, もともとガードの役割に関する戦術的知識が豊かであったと考えられる上位群の児童たちは, 分かっているにもかかわらず記述しなくなったということが考えられる。また, 実際に練習や試合などの経験を通して学んだ戦術的知識のうち, これが最も重要だと思ったことのみを記述するようになったということも考えられる。

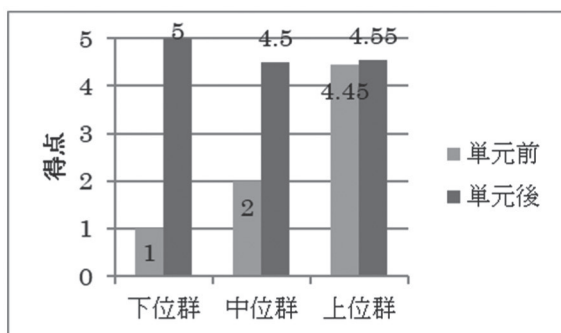


図3 手渡し作戦①の平均点

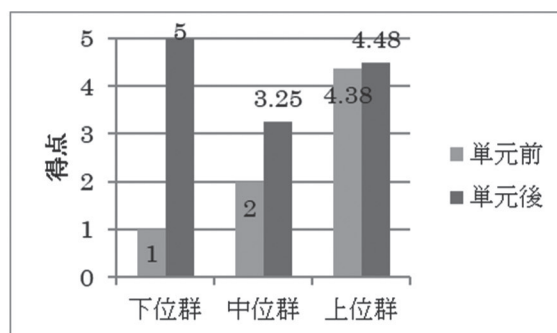


図4 手渡し作戦②の平均点

3. 3. 戦術的知識の変容の事例的検討

先の分析において, 単元後の得点の伸びが特に大きかった手渡し作戦の下位群に注目し, 戦術的知識の変容を事例的に検討する。以下に, 手渡し作戦の下位群の児童全員の記述を示した(表5)。

表5を見ると, 単元後にはすべての児童が「守る」, 「ガードをする」といったガードの役割を記述するようになっていることが分かる。このことから, 下位群の児童は, 単元前はガードの戦術的知識を身に付けていなかったが, 単元後にはガードの役割や原則といったガードの「宣言的知識」を獲得していたことが明らかになった。

また, 表5の単元後の記述を見るとガードの役割に加え, 児童20, 21(手渡し①), 児童20, 32(手渡し②)のように「思わせる」, 「だます」などのおとりのガードをして相手をだます動きに関する記述や, 児童5, 21(手渡し①), 児童16, 21(手渡し②)のように「かくす」, 「みえなくする」などの効果的なガードの仕方に関する記述がみられた。さらに, 児童13, 15(手渡し①), 児童13, 23(手渡し②)のように「もしも」, 「ばれたら」などの敵や味方の動きを意識してガードの役割について記述する様子もみられた。これらのことから, 単元後には敵や味方の動きを意識したガードの動き方や, 作戦を成功させるために必要となる効果的なガードの仕方に関するガードの「手続的知識」を獲得している児童も多く見られたことが事例的に明らかになった。

表5 手渡し作戦の下位群の児童の記述

作戦	児童	単元前	単元後
手渡し①	児童 5	右に行く	うまくまもる みえなくする
	児童 8	回転しながら②の人にボールをもらう	手をげんかいまでひろげて←分かったこと 相手に手渡ししたことをばれないように守る。
	児童 13	図のように左にフェイントして右に行く	②か③をまもる。 とちゅうで③がもっているのがばれたら③をまもる。
	児童 15	私が①だったら、左に行きます。 理由は、②の人がもっていると、相手に思もわせることができ、ボールをもっている③の人がゴールできるようになると思ったからです	②を守り、③があぶなくなったら、③を守りに行く。(よう子を見る)
	児童 20	なるべく、②と③がばれずにボールをわたせるように、うででかくす	②がボールを持っていると思わせるために、②をガードする。
	児童 21	②の人についていく。 理由は、相手をだませるから	相手をだまさずに、③の人を守る。 でも、ボールをわたすとき、左にいて、かくす。
手渡し②	児童 8	回転しながらわたされるように見せかけてもらわない	②と③が渡していないことがバレないように守る。(②と③の前に玉様みたいにたつ)
	児童 13	図のようにまっすぐ行って左に行く	②か③をまもる。 とちゅうで②がもっているのがばれたら②をまもる。
	児童 16	かくしす	②と③がボールをわたすところをかくす。 ③を守るふりをして②を守る。②のために前に出る。
	児童 20	なるべく②と③がボールをわたしているように見せさせる	③がボールを持っているように見せかけるために、③をガードする。
	児童 21	③の人についていく。 理由は、相手をだませるから	③の人を守る。 わたすふりをするとき、かくす。
	児童 23	左に行く。 わたしたと思わせる。	2の方へ行ってガードする。 ←と同じ理由で。(もしも、③ボールをもっている時にばれてしまっても、ガードしているので取られにくいから、3の方に行ってガードした方が良いと思う。)
	児童 32	左右動いてみえないようにする	わざとボールを持っていない方を守って相手をこんらんさせる。

4. 成果と課題

本研究は、フラッグフットボールにおけるオフENSEのガードに着目して、単元前後における児童の戦術的知識の変容を明らかにすることを目的とした。そこで単元前後に戦術的知識テストを行い、その記述を分析した結果、以下のことが明らかになった。

第1に、4つの作戦の合計という観点について対応のある平均値の差の検定（t検定）を行った結果、単元前に比べて単元後の得点が有意に向上していた。さらに、全体として1点、2点の人数が減少し、3点以上の人数が増加する傾向が見られた。これらのことから、多くの児童がガードの戦術的知識を獲得していたことが明らかになった。それは具体的には、ガードの役割や原則といったガードの「宣言的知識」や、敵や味方の動きを意識したガードの動き方といったガードの「手続的知識」であった。

第2に、4つの作戦の種類別という観点で、それぞれの作戦について単元前後の平均値を求め、対応のある平均値の差の検定（t検定）を行った結果、手渡し作戦①と手渡し作戦②は単元前に比べて単元後の得点が有意に向上していた。さらに、その内実について検討した結果、単元前に得点が低かった児童の得点の伸びが特に大きかったことが明らかになった。

第3に、手渡し作戦の下位群の児童の記述を事例的に検討した結果、下位群の児童は、単元後になると、ガードの役割や原則といったガードの「宣言的知識」を獲得しており、加えて、敵や味方の動きを意識したガードの動き方や、作戦を成功させるために必要となる効果的なガードの仕方に関する「手続的知識」を獲得している児童も多くみられたということが明らかになった。

今後の課題として、単元を通してゲーム中のガードの動きがどのように変容したのかについて検討すること、そして戦術的知識とゲーム中の動きの関係について事例的に考察することが挙げられる。

【謝辞】

本研究を進めるに当たり、授業を観察させていただいた広島県F小学校の学校長はじめ教職員の先生方及び児童の皆様には多大なご協力をいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

参考文献

- J.R. アンダーソン（著） 富田達彦（訳）（1982）『認知心理学概論』 誠信書房. pp. 235-269.
- 藤本翔子（2012a）「小学校体育科の授業における戦術的知識に関する研究－4年生のフラッグフットボール単元の事例を通して－」『広島大学大学院教育学研究科修士論文』
- 藤本翔子・木原成一郎・加登本仁・大後戸一樹・松田泰定（2012b）「小学校体育科の授業における戦術的知識に関する事例研究－4年生のフラッグフットボールを対象に－」『広島体育学研究』 38. pp. 22-30.
- リンド・L・グリフィン他（著） 高橋健夫・岡出美則（監訳）（1999）「ボール運動の指導プログラム」大修館書店
- Linda L. Griffin, Patt Dodds, Judith H. Placek, and Felix Tremino. (2001) Middle School Students' Conceptions of Soccer – Their Solution to Tactical Problems –. *Journal of Teaching in Physical Education*, 20 (4) : 324-340.
- 木原成一郎（1999）「イギリスの1980年代における体育カリキュラム開発の研究」『広島大学学校教育学部紀要』 21. pp. 51-59.
- 文部科学省（2008）「小学校学習指導要領解説 体育編」東洋館出版社
- 中川昭（2000）「状況判断力を養う」杉原隆ほか編著『スポーツ心理学の世界』福村出版. pp. 52-66.
- 岡出美則・吉永武史（2000）「イギリスのゲーム理解のための指導（TGFU）論－戦術学習の教科内容とその指導方法論検討に向けて－」『筑波大学体育科学系』 23. pp. 21-35.
- 鬼澤陽子・高橋健夫・岡出美則・吉永武史・高谷昌（2006）「小学校体育授業のバスケットボールにおける状況判断力向上に関する検討－シュートに関する戦術的知識の学習を通して－」『スポーツ教育学研究』 26. pp. 11-23.
- 鬼澤陽子・岡出美則・小松崎敏・高橋健夫（2007a）「アウトナンバーゲームを取り入れたバスケットボール授業における状況判断力の変容－小学校高学年児に対する戦術的知識テスト、状況判断テストの分析を通して－」『スポーツ教育学研究』 26. pp. 59-74.
- 鬼澤陽子・小松崎敏・岡出美則・高橋健夫・斉藤勝史・篠田淳志（2007b）「小学校高学年のアウトナンバーゲームを取り入れたバスケットボール授業における状況判断力の向上」『体育学研究』 52. pp. 289-302.
- 大後戸一樹（2004）「小学校6年間を見通した攻防入り乱れ系ボール運動のカリキュラム開発－フラッグフットボールを用いた戦術学習を中心に－」『体育科教育』 57 (4). pp. 58-62.
- 坂田行平（2008）「小学校体育科の授業における戦術的知識の変容に関する一考察－ボール運動における作戦の立案、修正過程を中心に－」『広島大学大学院教育学研究科修士論文』

- 坂田行平・木原成一郎・大後戸一樹（2009）「小学校のボール運動の授業における戦術的知識の変容に関する一考察－5年生のフラッグフットボールの授業を対象として－」『広島体育学研究』35. pp. 23-32.
- 吉永武史（2006）「学習内容を明確にしたボールゲームの授業づくり」『体育科教育』 pp. 19-23.
- 吉永武史・高橋健夫・岡出美則・松元剛・鬼澤陽子（2004）「フラッグフットボールの授業におけるサポート学習の有効性についての検討」『筑波大学体育科学系紀要』27. pp. 71-79.

A Study on Tactical Knowledge Acquisition among Fourth Grade Students in a Physical Education Class: Focusing on the Offensive Guard in Flag Football

Junya YOKURA¹, Seiichiro KIHARA², Kohei SAKATA³

- 1 Master's Program, Graduate School of Education, Hiroshima University
- 2 Graduate School of Education, Hiroshima University
- 3 Primary School Attached to Hiroshima University

Abstract

In ball games, knowledge of tactics is required both during a match and while planning operations before a match. Therefore, for children to learn to play ball games effectively, knowledge on tactics is important. This study aimed to clarify how children's tactical knowledge changed following a unit focusing on the offensive guard in flag football. To this end, a tactical knowledge test was conducted before and after the unit, and the results were analyzed. Findings showed that many children had acquired tactical knowledge related to offensive guards. Children gained two specific types of knowledge. First, they gained declarative knowledge about offensive guards, such as the role of the guard in the football game. Second, they gained procedural knowledge about offensive guards, such as how guards must remain conscious of the movements of opponents and teammates. Additionally, many children acquired procedural knowledge regarding the guarding tactics necessary to make plays successful.

Keywords : ball movement, flag football, tactical knowledge, guard